



巻頭言

42号

会員の皆様へ

桜水会会員の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。日頃より会の運営に関し事務局の先生方・役員・会員皆様のご協力に感謝申し上げます。私事では有りますが、一昨年夏北海道の釧路から100キロの標茶町の山中にて大動脈乖離を発症し救急車を乗り継ぎ緊急入院、意識が薄れる中思い出された事が学生時代・ Cutter部の横須賀合宿所・練習船日本大学号にて6ヶ月の遠洋航海実習等々学生時の事が走馬灯のように廻っていましたが、幸運にもどうにか生還すること出来ました。この間、会の運営等々行って頂きました方々に、この場を借り深く深く感謝申し上げます。

復帰後学内に入った際、同窓の皆に暖かく迎えられ戻れて良かったと実感しておりますと同時に、決意も新たに桜水会の運営に努力してまいる所存です。ご存知の通り少子化による影響は大学・短大の廃校また学部・学科の統廃合等消滅の危機にさらされる事が必至の状況です。桜水会では当海

洋資源科学科・旧水産学科をこのような憂き目に合う事の無いようより一層魅力ある学科にするには、教職員・桜水会会員皆様の絆・協力が不可欠です。

年一度の桜水会総会・懇親会を6月に開催しております。素晴らしく変貌を遂げたキャンパス研究室をご覧頂くと同時に親交を深めて頂きたいと思っております。

今後とも会員各位様の一層のご協力を期待しております。

(会長 橋ヶ迫 寛)

職場便り

鶴見大学歯学部病理学講座

中山亮子 (旧姓：牛越)

お世話になった先生、先輩方、同期の皆様、お元気でご活躍のことと存じます。日本大学には、1994年農獣医学部水産学科入学から、2000年修士課程の終了まで6年間在籍しておりました。

在籍中は、魚医学研究室（現・水圏生物病理学研究室）で廣瀬一美先生に厳しくも温かく丁寧な指導を受け、当時大学院生だった間野伸宏先生にも大変お世話になり、ウナギ鰓線虫症の血清診断や宿主免疫応答をテーマに研究を行っていました。その後、理化学研究所横浜キャンパスの構造生物学やシステムバイオロジーの研究室で10年間技術スタッフとして勤務し、2010年に鶴見大学歯学部病理学講座に研究員として着任、2014年に学部助手、2017年に助教となり現在に至ります。

現在の職場はメディアにもたびたび登場される斎藤一郎教授の指揮指導のもと、口腔乾燥症を生じる自己免疫疾患の病因解明や診断法・治療法の開発についての研究を行なっている研究室です。私はここで、病因ウィルスの活性化機構の研究に関わったのを皮切りに、遺伝子改変疾患モデル動物の作製ほか、新たな治療法開発のための附属病院や企業と連携した臨床研究や、その治療効果の機序を明らかにするための分子生物学的・遺伝子工学的実験など、非常に幅広い内容の仕事にやりがいを持って取り組んでいます。

理研で働き始めた頃は単なる実験技師だった私ですが、鶴見大学では斎藤教授からの日大の恩師廣瀬先生と同様の妥協を許さぬ厳しさと熱意を持ったご指導により、女性ホルモンが唾液分泌に与える影響に関する研究では研究代表者として科研費の採択も受け、いつのまにか研究者および教員として日々の仕事に励んでいます。

卒業後18年の間で、結婚し2人の子供

に恵まれるなど、女性としての大きなライフイベントをいくつか通り抜ける中で仕事を続ける事は、特に子供が小さい時は、ワンオペ育児や保活など現在もニュースで話題になるような困難が多くありました。しかし、時には派遣や非正規雇用の身分を経つつも、実験室という大好きな空間になんとか居続けた事が今の自分に繋がったと思っています。それは、日大で仕事に対する誠実な向き合い方と、大変さの中に楽しさを感じる精神が身につけられたおかげでもあり、先生や先輩方には大変感謝をしております。母校の学科も女子学生が増え、卒業後はそれぞれ就職をされると思いますが、その場所で極力多くのスキルを習得しておく、出産や育児等で一度職を離れる事があっても再就職やステップアップがしやすく思います。大学で学んだ事がずっと人生の糧となりますよう、後輩の皆さんを応援しています。

鶴見大学は、総持寺という大きなお寺の敷地内にあり、パワースポット特有の静謐な空気感と、時折聴こえる鐘の音や読経の声、托鉢に出かける雲水さんたちの鳴らす錫杖の音の中で、今日もまた実験台に向かっています。

（第47期）

古野電気株式会社

福島 翠

私は学部生、院生の学生生活6年間、その後実習助手として5年間、合計11年間も本学科にはお世話になりました。毎年たくさんさんのドラマがありとても楽しく刺激

的な時間でした。11年の間にはいろいろな事があり、恩師の退官、校舎の建て替えもありました。人生の3分の1を過ごしたこの場所を離れることに寂しさはありましたが、2016年春、ご縁あって今の会社に入社しました。本学科の皆様でしたらご存知の方もいらっしゃると思いますが、魚群探知機のパイオニアである古野電気株式会社という、船舶用電子機器のメーカーです（下田臨海実験所のすぎき2世にも、弊社の魚探を装備頂いております）。私はきっと漁業系の部署に就くのだろうと思っておりましたが、商船を扱っているところの営業課に配属となりました。商船とはタンカー、コンテナ船、自動車船、旅客船など商行為を目的に航海する船舶です。私は営業アシスタントとして、それら大型船の安全航海に必要な機器の販売、点検、予防保全、修理などの窓口を行っております。日々の業務は修理案件が多く、やはり船上という劣悪な環境（振動、潮風、冷暖など）ゆえ、長年装備頂いている機器は故障してしまうことがあります。プリンターの印字不良などの容易な案件から、航海に義務とされる機器が動かないなどの重大な案件（船を止められてしまう）まで様々です。ここで想定外だった事は、商船は海外を航海していることが多く、修理対応をする現場が聞きなれない国であったり、時差があったり、メールが英語であったりと・・・もちろん修理の報告書も全部英語。学生の頃は研究のために苦手な英語をやむなく読み書きしておりましたが、その後はのらりくらりと日本語ライフを送っていたの

で、今になって苦勞をしております。話がそれましたが、ここで製品を2つほど紹介させていただきます。

弊社は多種の船用機器を取り扱っておりますが、商船で花形となるのはRADARとECDISです。RADARとは船の上につけたアンテナより電波を出し、その電波が他船やブイや鳥、島などにぶつかって、その一部が跳ね返ってくるという性質を利用し、他船との距離や方位を正確に測定することができる機器となります。ECDIS（電子海図表示システム）は、海図情報をデータベース化し、モニターに表示します。航路計画に用いる紙海図は量が多く持ち運びが大変ですが、ECDISでしたらDVD1枚で済み、GPSに接続すれば位置情報もPCがプロットしますので、労働力も削減できます。このように弊社の製品は、安全航行のお手伝いもしております。

まだまだ勉強中の身ですが、このような機会を与えて頂きありがとうございます。もしご興味を持たれた方がいましたらぜひ桜水会でお声かけ下さい。

大学を離れても先輩・後輩の皆様に出逢うことがよくあります。このつながりを大切にしていきたいと思いました。

今後ともよろしくお願い致します。

（第58期）

神奈川県庁（水産課）

山田 理子

2017年の3月に増殖環境学研究室で無事修士課程を修了した後、4月からは神奈

川県庁で行政職として働かせていただいております。神奈川県「秋季チャレンジ」という制度を利用し、杉田先生、糸井先生をはじめとした先生方には大変ご心配をおかけしながら何とかいただいた内定でしたが、数ある配属先の中でも1年目から水産課に配属していただくことができ、馴染みのある分野で新社会人としてのスタートを迎えることができた点については非常に幸運だったと感じています。

とはいえ、ウェーダーに軍手で化粧っ気もなくフィールドワークに勤しんでいた学生時代とは程遠く、慣れないヒール靴に満員電車での通勤や書類仕事に四苦八苦しながらも、ベテランの先輩方に支えられ、何とか自身が担当する業務をこなしてきました。日々勉強の毎日でしたが、まず頭に入れ込まなければならなかったのが「神奈川県内の地理」というのがなんとも情けない話です。大学進学を機に宮城の田舎から上京し、神奈川で暮らし始めて7年が経とうとしていますが、「ハッセ」と聞いたときには字面の見当すらつかず、先輩方に笑われてしまいました。その後、事あるごとに地図を広げてはたたみを繰り返したおかげで今でこそあれは「初声」のことだとわかりますが、未だにこの地図は机のすぐ手に取れる場所に置いてあります。

また、大学院まで含めると6年間海洋系の分野で学んできましたが、「水産業」という視点で見ると、まだまだ勉強不足だと感じる事が多くありました。漁業就業者数の減少や磯やけ、資源管理の問題など、一般論として知っていた部分はあるもの

の、1年間かけてようやく神奈川県における水産業の現状や課題がわかってきたところではあります。

本県ではキャリアプランの形成のため、採用されてから最初の10年間は複数の所属を経験し、自身の適性を見極める期間として設定されています。およそ3か所を回るのが通例ということですので、今後どういった部署で経験を積ませていただくことになるかはわかりませんが、まずはあと2年間、神奈川県の水産業を活性化していけるよう、微力ながら精一杯取り組んでいこうと思います。

(第64期)

サンシャイン水族館

-水族館の飼育員の話と伝えたい事-

今井 俊宏

私は平成27年度の卒業生です。現在は東京都池袋にあります、サンシャイン水族館の飼育員として日々、魚の飼育を行っております。今では、担当の水槽を持たせていただき、楽しく仕事を行っていますが、その裏側では大きな責任を抱えて仕事をしています。水族館の飼育員を夢に日々勉学に励んでいる学生の方はとてもたくさんいらっしゃると思います。しかし、飼育員というのは狭き門であり、途中で持っている夢をあきらめてしまう方もたくさん学生時代に見ました。やはり、インターンシップでの経験で実際に飼育業務を行って「違う」と思う人もいると思います。

私も飼育員になることが夢でしたが、実際に今働いているのは、あきらめなかった

ことが一番と思っています。実習やインターンの経験は多くなく、飼育員は生き物の飼育をするだけと思っていました。

しかし、実際にはイベント企画や生物研究、展示計画といった多くの事を考え、実行していかなければいけない仕事でした。入社して研修後、6月1日の飼育員として動き始めた時のことは今でも覚えています。右も左もわからず、何をやればいいのか？今はどこにいけばいいのか？わからないことしかありませんでした。しかし、わからないこと、迷ったことがあれば私は上司に聞きました。今となっては、サンゴの保全プロジェクトや月ごとのイベントに携わっています。また、パフォーマンスやガイドツアーなどでお客様の近くで水族館の事を話していたり、担当イベントがテレビにも取り上げられたりもしています。そんな飼育員の仕事が大変ですが、楽しいです。

全ての事を知っている人間はいません。なので、今いろんなことで迷って悩んでいる人は多くいると思います。学生ともなればその悩みはもっと多いはずです。なので、いろんな人に聞いてほしいです。私も就職が決まらない中、大学の先生の一言が今の仕事に繋がり今でも感謝しています。教授、准教授、学科事務、友達、家族、皆さんには聞くことができる人はたくさんいます。ぜひ相談をしてみてください。

そして伝えたいことがもう一つあります。それは責任を持つということです。これから先、就職して各分野で皆様が活躍されると思います。しかし、どんな仕事でも

責任というものは付いてきます。責任感は今からでも培ってください。私からのお願いです。

多くの事がある日々の中で思うように進まないことはこれから先たくさん出てくると思います。そんな時こそいろんな人に相談して解決してってください。そして自分の中の責任感を失わず日々頑張っしてほしいと思います。

私自身まだまだ、経験が浅い飼育員（会社員）ですが、これからも努力し、頑張っていきます。もし、同じ分野での仕事ができれば、是非声をかけてください。皆様の今後の活躍を期待して、この文章に代えさせていただきます。

(第 65 期)

研究室便り

海洋生物生理学研究室

昨年の4月から、2回目の学科主任を仰せつかって何かと忙しくしています。4年前に比べると学部・学科の主任仕事はかなり増えていて、つい研究室の業務が疎かになってしまいますが、鈴木先生にカバーしてもらって何とかやっています。

学部・学科といえば、このところ受験生が毎年減少していて、学部当局はさうとう危機感をもっています。学科をまたいだ改組も視野に入れているようですが、内容はまったくわかりません。これは人事にも影響していて、教員の新規の採用はなかなか認められなくなっています。

さて、私は魚類学という科目を高井先生、塚本先生と分担で担当していて、主に生理学的な内容を教えていますが、最近他学科の受講者が多いのが気になっていました。今年などはMSRの受講者150名に対し、70名近くの他学科受講者がいました(特に、くらしの生物と食品生命が多い)。たまたま、他学科の受講生に授業態度の悪い学生がいたので注意するとともに、期末テストの朝比奈分はすべて記述式にする、と宣言してしまいました。その結果、まったく同じ授業を取っているにもかかわらず、他学科の受講者の平均点はMSRの学生の半分以下でした。1年生の科目なので共通のバックグラウンドはおそらく高校の生物くらいですから、これは、対象に興味をもって授業を聴いているかいないかの違いを反映しているのだと思います。他

学科の受験生が大幅に減っているのに対し、MSRの受験生はそれほど減っていないことから、海の生物に興味をもつ高校生は一定数存在しているようです。このような興味や意欲をもつ学生を積極的に集めていくにはどうしたらよいかと考える毎日です。

近くに来る機会があれば、研究室にも是非お立ち寄りください。

(朝比奈)

卒業生の皆様におかれましては、健やかに過ごしのことと存じます。今年度の海洋生物生理学研究室では、20名の4年生が卒業までたどり着き、また、吉田和乎君が『板鰓類胎盤型胎生種ツマジロ胎仔における栄養吸収機構の解明』という論題で博士前期課程を修了しました。今年度、私は2度目の担任を仰せつかり、諸々の対応に時間を取られることも多く、鯨類をテーマとする学生が多かったのですが細かいところまで手が回らず、大学院生の力を借りて研究や実験を進めていたような状態でした。しかし、粘り強く課題に取り組む学生も多く、大学院生も面倒見がよく、また外部の先生方のお力添えもあり、魚類も含め、いくつかの成果を得ることが出来て安堵しているところです。

また、ご存知の通り、大学では卒業生を講師として迎えて、仕事内容などについて話してもらった講義を行なっていますが、教員生活13年目にして、学生時代を知っている卒業生たちに講義をしてももらうことが増えてきました。しっかりとし

た口調で堂々と、楽しそうに自分の仕事内容を話してくれる卒業生を目の当たりにして、頼もしさと嬉しさを感じるとともに、自分も年を重ねていることを(ポジティブに)実感している次第です。

ともあれ、何かの折にはぜひ研究室に足をお運び下さい。

(鈴木)



海洋環境学研究室

卒業生の皆様には、時下、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平成29年度の本研究室の構成は、廣海十朗教授、荒 功一准教授、小糸智子専任講師の教員3名、大学院博士前期課程1名、4年次学生4名でした。

今年度は博士前期課程に所属していた島本君が“相模湾沿岸域における微小プランクトン食物網の構造と栄養動態”という題目で修士号を取得されます。島本君は修論発表の準備中や修論執筆中も入室予定の3年生への指導を怠らず、後輩達もさぞ心強かったのではないかと思います。彼には研究室入室者の教育訓練用資料(試薬の

管理や廃棄物の分類など)をまとめてもらうなど、細々したことをお願いしてきましたが、いつも快く対応してくれたので非常に助かりました。これまでの3年間で培った知識や経験を活かし、社会で活躍されることを願っております。

荒准教授は、2000年12月より継続して17年目となる『相模湾における沿岸生態系動態の解明(プロジェクト“SHONAM”)』を大学院生1名、学部4年次学生4名とともに実施しており、同海域の物理・化学環境特性やプランクトン(一次生産、ピコ〜メソサイズの全ての生物群)の生産性と栄養動態などを調べています。今年度は少人数だからか皆仲が良く、一丸となって研究に取り組むとともに、研究室の雑用もてきぱきとこなしてくれました。特に海洋環境学実験の際は40人を超える受講者(2年生)の指導補助、準備と片付けをこの5人で頑張ってくれました。少人数で大人数の対応をすることについて色々思うところはあったと思いますが、それを感じさせず爽やかに対応してくれたことには感謝しております。

小糸専任講師は深海性多毛類の研究のため鹿児島湾の調査に参加しました。鹿児島湾では世界一浅い場所に「サツマハオリムシ」というチューブワーム(環形動物)が生息しています。サツマハオリムシは口も肛門もないというのが最大の特徴であり、どうやって栄養を獲得しているか?というのは追々紹介していこうと思います。今年度は岩手県の大槌に滞在し、シロザケ

の短期飼育とサンプリングも行ないました。大槌は先の震災で甚大な被害を受け、いまだにその爪痕が至るところで見受けられます。大槌へは学生時代に何度か行ったことがあります、当時あったはずの家屋や商店がないので本当にこんな地形だったかと茫然としました。それでもサケは遡上してくるので、月並みな表現ですが、自然の逞しさを実感いたしました。来年度は年度明けすぐに“ハイパードルフィン”を掲載した“新青丸”で、伊豆小笠原海域の調査を実施します。ここ最近、表層水の変色が報告されているので、海底火山が活発になっているようです。無事希望するエリアに行かれるといいのですが...

今年度の本学科海洋生物資源応用コース（JABEE 対応コース）の技術者教育の一環である特別講義（3年次、前期）では、7月8日（水）に宮下一明氏（第38期、（株）東京久栄）が『環境アセスメントにおける技術士の役割』、7月15日（水）に市橋 理氏（第37期、アジア航測（株））が『環境コンサルタントと東日本大震災』という標題で講義を行いました。

OB・OGの皆様にはお仕事の合間に訪問していただき、近況をご報告いただいているほか、様々な学部・学科のイベントにご協力頂いており、心より感謝申し上げます。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

平成30年度の研究室は、上記の教員3名、4年次学生20名となります。

卒業生の皆様が湘南（藤沢）キャンパスの近くへお立ち寄りの際には、海洋環境学

研究室にお越し頂き、後輩達を叱咤激励して頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

（小糸）

増殖環境学研究室

本年度の研究室構成は、教授・杉田治男、准教授・糸井史朗、研究員1名、大学院博士前期課程2年次2名、学部4年次26名の総勢31名でした。研究成果は、著書1冊、学術論文が6編（うち、国際誌4編）および口頭発表7件（うち、国際会議5件）でした。糸井先生が主導するフグ毒に関わる海洋生態学や魚類分類学に関する研究は順調に発展しており、学生の関心も高いです。私は、この一年、図書館分館長として事務職員の助けを借りながら、慣れない仕事に励んでおります。また、前号でもご報告いたしましたが、昨年9月22～24日に東京海洋大学で開催された日本水産学会創立85周年記念国際シンポジウム（メインテーマ”Fisheries Science for Next Generations”）の運営に糸井先生と共に携わりました。本シンポジウムには日本は基よりアジア諸国からの参加者も多く、盛会裏に終了しました。小島隆人先生、糸井先生、鈴木美和先生、高井則之先生、福島英登先生にはシンポジウムのプログラム委員として大変お世話になりました。また、大学院生の上田紘之君の発表”Effects of sexual maturation on the toxicity of the toxic flatworm *Planocera multitentaculata*”に Best Presentation Award（ポスター賞）が授与されました。研究室では2人目の快挙で

すので、うれしい限りです。

2008年のリーマンショック以降、落ち込んでいた就職状況がここ数年、元の水準まで戻りつつあります。企業の採用意欲も高いことから、当時と比べると内定が出やすくなったのは言うまでもなく、多くの学生は夏休み前には就職先を決めておりました。新聞などによると、学生を採用するときに重視する項目として「コミュニケーション能力」「主体性」「積極性」「チャレンジ精神」「行動力」などをあげる就職担当者が多いようですが、これらの能力には後天的なものも多く、サークル活動やゼミなど日常生活の中で時間をかけて身につける必要があります。学科では3年生になると業界・企業研究を早めにするよう指導していますが、多くの学生は、就活開始直前になっても業界や企業を絞り切れないうまま、就職戦線に突入しており、この辺りが就職指導の上でもっとも大きな悩みです。多くの情報がインターネットを通じて入手できる時代になりましたが、ネットが直接、各自に適した職業を教えてくれることは先ずありません。一方、本に親しんだ経験が、人生の岐路にさしかかった場面で役立つことは少なからずあります。例えば小説一つをとっても疑似的に主人公の人生を辿ることにより、自分の知らない志向や適性に気づき、それまでとは異なる進路を選択することもあるのです。何かを求めて読書をするることにより、普段は気づかないヒントを拾い上げることにつながるのだと思います。我田引水にはなりますが、学生諸君には図書館をおおいに利用して

多くの本と親しみ、その中から自分に適した職業を見つけてほしいと思います。

最後に、私事で恐縮ですが、本年3月末日をもちまして定年退職となります。思えば昭和55年4月に母校に助手として着任してから早38年の歳月が経ちました。私立大学の状況を増殖曲線に例えると、私が在職した時期は成長期～静止期と重なります。この間、学内外でも大きな変化があり、実にいろいろなことがありましたが、今となってはよき思い出です。また、昨年3月には「水産増養殖に関する微生物学的研究」に対して平成28年度日本水産学会功績賞が授与されました。このような荣誉は私には過ぎたものですが、恩師・出口吉昭先生、糸井先生をはじめ多くの教職員、大学院生、卒論生の皆様に支えられての賜物であり、これらの方々を代表して頂いたと考えております。関係各位にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。幸い4月からは年度更新にはなりますが、特任教授として教育・研究に携わることになりましたので、しばらくは10号館3階の増殖環境学研究室におります。こちらにお越しの折には是非、研究室にもお立ち寄りください。
(杉田)

海洋生物資源利用学研究室

平成27年度より研究室に福島英登准教授を迎え、松宮と福島先生の2名の教員による研究室運営が3年目を終える時期となりました。新たな研究室運営も落ち着いて来た状況です。平成29年度の研究室

所属学生・研究員は大学院博士後期課程3年次1名、大学院博士前期課程2年次5名・1年次1名、4年次学生18名、研究員(博士)1名でした。本年度は博士後期課程ならびに前期課程の修了年次を迎える学生がそれぞれ1名および5名おりますので、後期よりかなり慌ただし日々が続いておりました。現時点では、大学院修了年次学生は何れもスケジュール通りに発表、審査、論文作成を進めております(この原稿作成時は博士・修士共に論文を製本中でした)。また、4年次学生も全員卒業研究発表を終えることが出来ました。新年度(平成30年度)は大学院博士後期課程進学者1名、博士前期課程2年次進級者1名(前期課程の受験者もおります)、4年次学生は24名を予定しており、すでに各自の研究予定テーマを決定致しました。新年度も相変わらずの大所帯で研究活動に励む予定であります。

研究内容に関しては、福島先生の研究テーマに関連する機器も揃いつつありますので、先生の専門である水産食品の加工・貯蔵に関する基礎・応用研究のテーマをさらに充実させております。また、生化学・分子生物学的手法に必要な機器も充実しつつあり、タンパク質の分離、電気泳動、PCRなどは複数名が同時進行で実験出来る状況にあります。本年度も研究室所属の大学院生が日本水産学会、同学会国際シンポジウム、日本キッチンキトサン学会で研究発表致しました。中でも、国際シンポジウ

ムにおいては2名の博士前期2年次学生が英語での口頭発表を実施しました。また、それらの研究成果の一部を国際雑誌に投稿し、数編がすでに掲載されております。次年度も、基礎研究としてはキチン関連酵素、その他多糖分解酵素、パラミオシン、冷凍・冷蔵貯蔵と魚類筋肉タンパク質の変化との関連などを、応用研究としては、アレルギー性の低い水産発酵食品の開発、イカ肉を原料としたゲル化食品の製造、乳化すり身の新たな利用、魚卵の品質などを予定しております。バイオマスの有効利用に関する基礎・応用研究のテーマも含め、水産加工技術から生化学・分子生物学的手法までを幅広く用いて研究を進めております

平成29年度は学科のカリキュラム改正後4年目を迎えました。したがって、1～4年次まで新カリキュラムでの講義・実験・実習を実施しました。新カリで開始した研究室入室予定3年次学生を対象とした海洋生物資源科学実習Ⅰ(前後期)も2年目を迎え、研究室の各研究テーマで実施している食品加工技術、食品の理化学的測定・物性測定、酵素活性測定、タンパク質の分離・分析技術、ならびに遺伝子増幅・解析技術を体験・学習しました。

4年次学生を対象に食品加工実習(4年次、海洋生物資源科学実習Ⅱ)を実施し、今年もサバ水煮缶詰、ポークソーセージ、ミカン缶詰の製造、工場見学を実施しました。最先端の生化学・分子生物学的手法のみな

らず、従来からの食品加工技術習得も食品企業で活躍する人材育成の上から重要と考え、継続して実施しております。

(松宮)

魚群行動計測学研究室

本年度は学部4年生22名、大学院修士課程2年1名と教員2名の体制でした。院生および学生は、北海道標津、同洞爺湖、下田臨海実験所、静岡県伊東市赤沢と学部の実験室などで各自研究に取り組みました。学部生は1月27日の卒業研究発表会で、大学院生は2月2日の修士論文発表会で、全員が無事に口頭発表を終え、修士論文および卒業研究要旨集の作成も概ね終えています。学部4年生は以前のような金文字の立派な卒業論文ではなく、各自が図表込みの2頁の要旨を書き、全員で1冊の要旨集を昨年度から作成しています。徹夜の連続で卒論を書き上げた世代の卒業生からすれば、甘い！と思われるかもしれませんが、これも時代の流れです。これとて完成への道はなかなか骨の折れる作業ですが、1人も欠けることなく提出し、全員の研究成果が一覧できるコンパクトな要旨集となっています。

学生の進路は、中学校および高等学校の就職に就く3名を始めとして、ほぼ全学生が就職内定を得た他、東京大学大学院に1名が進学を決めました。世間では就職戦線の好況が伝えられていますが、当学科の学生も順調に進路を決定することが出来ました。なお就職先は、水産関係他の民間企業から農業協同組合や漁業など多岐に渡

り、その場所も全国に及んでいます。

例年同様、5月に鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸による東シナ海への航海によるトロール漁業と奄美大島寄港、12月には北海道大学水産学部練習船おしよろ丸による鳥島近海でのマグロ立延縄操業の乗船実習を実施しました。さらに本年度からの新たな試みとして、商船系大学および高等専門学校以外でも利用可能な社団法人グローバル人材育成推進機構所属の帆船「みらいへ」での乗船実習も実施しました。これまでの漁業実習とは一風変わった商船系の帆船航海でしたが、9月に横浜から田子ノ浦までの3泊4日の日程で実施しました。マスト登りやロープ操作などこれまで体験したことの無い実習内容の他、船上でのお別れパーティーもあり、学生には好評だったようです。いずれの航海も練習船を保有しない本学学生達にとって貴重な体験であり、心に残る実習となったことと思います。

この2年間大学院修士課程の院生として、4年生の面倒をきめ細かく見てくれた沖山君も、いろいろと苦勞の連続だった4年生もともども研究室を巣立つことになり、残された教員としては寂しい限りですが、これから社会の荒波の中で揉まれながら、社会人として、そしてひとりの人間としても立派に成長出来るよう、個人々々で努力が必要であるばかりか、会員各位にも温かいご指導ご鞭撻を賜れますよう、お願い申し上げます。

終わりに、今年も数多くの卒業生より物心両面で様々なご厚情を賜りました。この場

を借りて厚く御礼申し上げます。

(小島)

水族生態学研究室

平成 29 年度の所属学生は、大学院生 1 名（博士後期 2 年）、学部 4 年生 22 名、学部 3 年生 22 名の合計 45 名でした。今年度は助教の中井静子先生がご出産で産前産後休業と育児休業を取られましたので、ほとんどの期間、教員 1 名で研究室を運営する形となりました。しかしながら、大学院生の伊藤洗君が研究室運営や学部生のサポートに尽力してくれたため、例年と変わらないくらいスムーズに研究室運営を進めることができました。伊藤君は研究テーマの垣根を越えて学部生達と交流を交わし、4 年生達が仲間意識を深めて団結することに一役も二役も買ってくれました。今年の水族生態学研究室は伊藤君を中心にして回っていたと言っても過言ではありません。

その伊藤君が取り組んでいる研究は、研究室の中心テーマの一つであるメジナ属魚類の研究です。故・吉原喜好先生からバトンを受けた研究室の伝統的テーマです。この 2 月に生物資源生産科学専攻の中間発表会が行われ、伊藤君が分科委員会の先生方を前にして口頭発表を行いました。研究課題名は「北西太平洋海域におけるメジナおよびクロメジナ（スズキ目メジナ科）の生活史戦略」です。発表は無事に終わり、伊藤君が現在の方向性で博士研究のゴールに向かうことを承認して頂きました。中間発表会の開催にご尽力頂きました専攻

主任の小島隆人先生に、この場を借りて御礼申し上げます。

4 年次の学生達も、卒業研究、ゼミ、実習などの研究室活動に熱意を持って積極的に取り組んでくれました。卒業研究には将来への可能性を秘めた新規テーマも幾つか含まれており、私も研究の展望をあれこれと考えて楽しむことができました。非常に稔りの多い一年でした。現在の 3 年生達も積極的に楽しいメンバーが揃っておりますので、来年度また面白い活動成果を見せてくれるだろうと今から楽しみにしております。なお、本研究室の研究成果については、今後、研究室のホームページ上で随時紹介して行く予定です。学科公式ホームページからアクセスできますので、ぜひ覗いてみてください。

最後になりますが、私・高井は昨年度末に大学本部で 15 年勤続の表彰を受けました。時の流れの速さに、今更ながら驚いております。私が助手として働き始めた頃の学生の皆さんは、今も元気に過ごしておられるでしょうか。ぜひ、桜水会報などで近況を発信して頂ければと思います。皆様のご多幸をお祈りしております。

(高井)

昨年の 8 月下旬より産休を取らせていただき、9 月に男の子を出産しました。昨年は妊娠中ということで下田の基礎実習の担当を免除いただき、毎月の下田での卒論調査も行いませんでした。学科の教職員のみなさま、そして今年の担当学生にいろいろとご迷惑をおかけしました。

4年生の卒論のサンプルとなる津波後の東北干潟調査のみなんとかこなし、津波被災干潟の海産巻貝のテーマで2名、一般教養の小沢広和先生と共同研究をしている貝形虫のテーマで2名、無事に卒業論文をまとめることができました。

昨年は東日本大地震の後に行ってきた他の研究機関との共同研究の成果が発表され、学部のHPや新聞に取り上げていただきました（海辺の生物も「津波にまげねぞ！」）。震災から6年目の追悼の日に、干潟生物は巨大津波に耐える強さを持っているという明るい話題を提供することができました。

いつも卒業生に会える学部祭を楽しみにしていますが、昨年は育児休暇中で研究室におりませんでした。今年はみなさまにお会いできればと思っております。ぜひ母校まで足をお運び下さい。

(中井)

ウナギ学研究室

今年度最大の研究室イベントといえば、よこすか航海でした。昨年、2017年5月13日に横須賀を出航し、5月27日にサイパンで下船する15日間の短い航海でした。しかし、5回のしんかい6500の潜航、環境DNA調査、Deep-Tow観察など、もりだくさんの航海で、興味深い成果がたくさん得られました。ウナギ学研究室から樋口貴俊、竹内綾、芹澤健太、マイク・ミラー、それに私の計5名が乗船しました(写真)。ウナギ学研究室OBの渡邊俊さんも近畿大学から駆けつけてくれました。

まずXCTDによって塩分フロントの予備

調査を行い、フロントの位置を決めました(渡邊)。そして、その南側で内部潮汐エネルギーの高い部分を集中調査海域(高エネルギーパッチ)として選びました(樋口)。その後いよいよ本調査にはいったわけですが、結果のみいうと、パッチ中央点でDeep-Towによって親ウナギらしき映像が記録され(芹澤)、その同一地点で、産卵ピークの新月2日前、産卵イベントによるものらしい環境DNAの強いシグナルが検出されました(竹内)。シナリオ通り、あまりにもうまくできすぎたような成果に、われわれも半信半疑でした。しかし、この成功によって、われわれは近い将来、あの広大な海洋のなかで、新月の夜密やかに行われる親ウナギたちの神聖な儀式を必ず垣間見ることができるといえるはずだという確信を得ることができたのでした。

今回の航海の様子は、NHK ETV 特集の1時間番組としてまとめられ、2017年9月30日23:00から放映されました。しかし、残念ながら深夜の放映だったので、あまり多くの人には見てもらえなかったようです。今回の航海の成果は、日大、近大の他に、JAMSTEC、東大、北大の共同研究のたまものです。それに、同乗したNHKのテレビクルーやMWJ、NMEの方々の協力があったからこそのものでした。心から感謝します。

もうひとつの報告すべき大きなイベントといえば、それはうなぎキャラバンでしょうか。2015年度と2016年度の2年間、「うなぎプラネット」という総合研究プロジェクトを実施したことはすでにご報告

したことと思いますが、その中でうなぎキャラバンという出前授業をやってきました。全国の小中高校へ出向き、ウナギの授業をするというものです。小学校4年生の国語の教科書に「ウナギのなぞを追って」という科学読み物を執筆したことがきっかけで、多くの学校から特別授業の依頼が舞い込んできました。その結果、2015年度は88校、2016年度は84校に出向きました。今年度は3月末までに87校になりそうです。毎年およそ4日に1校訪ねて回った計算になります。最初は、われわれが大学でやっているウナギ研究の成果を社会に還元して、それが社会啓発になったり、将来ウナギ資源の保全に少しでも役立てばいいなと考えていたのですが、最近では研究することの楽しさ、面白さ、わくわく感をお子に伝えたいと思うようになってきて、少し方向が変わってきました。子供達が目を輝かせて航海の話に耳を傾けたり、食い入るようにウナギレプトセファールの標本をみたりするのを目の当たりにするのはまことに新鮮で、うれしいかぎりです。やりがいがあります。研究室の山梨津乃さんも一緒に回ってくれています。これからも研究の傍、なるべく暇を見つけてうなぎキャラバンを続けていきたいと思っています。

日大ウナギ学研究室には新しいポストドク・萩原聖士さんがやってきました。毎日せせと論文をまとめています。研究室の学生の良い相談相手にもなってくれています。飯島卓也くん、清水まどかさんの修士1年組も元気にやっています。来年はい

よいよ修士論文をまとめるので、少し顔つきが変わってきました。3年生の伴野允勇くんがウナギ学研究室に入ってきました。卒論の籍は朝比奈研に置かせてもらって、病理の間野先生や難波さんにウナギの魚病の手ほどきを受けることになりました。芹澤くんは立派な修士論文を書き上げ、就職も決まって4月から研究室を離れることになりました。宮崎美郷町の実験池でひとり黙々とウナギ研究に精進していただだけに、研究室に残るわれわれとしてはさみしい限りですが、この経験や知識を活かして、新しい環境でも大いに頑張ってくればありがたいです。以上のように、ウナギ学研究室はみんな元気にやっています。OB・OGの方々もひまがあればぜひ顔を出してください。最後に、皆さんのますますのご活躍を心からお祈りします。

(塚本)

生物機能化学研究室

-Salk 研究所 (San Diego) 留学記-
“森さんが乗る飛行機、落ちればいいのにね!”と出発直前の教授会で、ある先生から言われて思わず吹き出してしまった。しかし、まんまと San Diego に到着!

今回の留学先は San Diego にある世界のトップクラスの研究所である Salk 研究所に7か月お世話になった。この研究所は小児麻痺ワクチンの開発者であるジョナス・ソーク博士が建築家ルイス・カーンに設計させた作品として世界的に有名な建物である。建築のコンセプトは研究室の壁を取り除き相互に切磋琢磨しながらも、独り静かに勉強出来る空間の創作にあった。外見はコンクリート打ちっばなしの建物

から海を眺めることが出来るようになっていた。残念ながら私の研究室はコンクリートに囲まれた地下にあり、箱庭から差し込む日差しを感じる程度であった。メンバーも私とボスを含めて6人しかいないラボ（台湾人1名、韓国人1名、他アメリカ人）である。人数は少ないが皆生き残りをかけて研究に没頭している為、無駄話をしている人はいない。実験と論文作製に追われ、他人の事には全く興味を示さない。ただ黙々と仕事をこなす研究室で、皆挨拶すらも無く現れては去っていく。

Salk の素晴らしいところは世界中の研究者の講義がほぼ毎週のように聞ける点にある。それも、世界のトップクラスの研究者の講演を直接聞くことが出来るのである。先日も昨年のノーベル賞受賞者が来て講演をしてくれた。脳科学から免疫、ガン、糖尿病など本当に多くの講義を受けることができる。更に驚くのはセミナーの時にはピザや夕食、ビールやワインも無料で提供されているのである。この様な形式を取り、研究者同士が交流できるように図っているのである。

この研究所には専任の研究者は62名でその他300名程は全て自分達が一流であることを自負するポスドク（博士号を取得した後、大学や研究所に就職するために研究成果を出さなくてはならない期間）である。20年前は日本人が大勢いたと言われていたが、現在では中国人がそれにとって代わり、研究所全体でも日本人は十数人であった。

1つ気になることを聞いた。多くの日本人がポスドクでここに来ては、殆ど口を聞くことも無く、人と目を合わせることも無

く、ただがむしゃらに、そして真面目に研究だけをして潰れていったとのことだ。私の場合は逆に人の目を見るタイプなので、それが禍して猿ヶ峽温泉で、危うく猿に噛まれるところだった。

就職先を求めて海外に来るのであれば熾烈な戦いの中に入らなければならない。その戦いと云うのは研究成果だけでは無いのだ。どのように人をまとめて、プロジェクトを成功に導くのか？と云う人心掌握術が優れていなければ生き残ることは無理なのである。当然、なんだこいつは？と思うような反日感情に満ち溢れている人間もいる。そのような人も使って行かなければならず、自分の感情をコントロールする力が無ければ心の病に犯される事になる。東アジア人の特徴として周りの目を気にするあまり、自分が嫌われているのでは？あいつは俺の事を嫌っているに違いない。特に日本人はその段階でその人との人間関係を切ってしまう傾向があるとSalkで長く働く研究者に言われた。

多分、彼らを感じた違和感は当たっており、実際は嫌われていたりするのだろうが、プライベートな感情を押し殺して目的に向かってビジネスライクに対応する能力が特に求められるのだろう。

もう一つ、海外での生活で大切な事がある。自ら交渉である！私の場合はここで使えるお金はほとんど無く、日本から持ってきたお金は自分の滞在費と飛行機代ですら賄いきれないのであった。そうになると、自分の研究を発展させるためには、どのようにボスや他の研究者を説得してお金を出させるかがポイントになる。つまり、交渉である。この抗体を使いたい、電子顕微

鏡で観察したい！色々な事が出てくるが、それをどのように論理建て、相手の心の中に入り込むのか？を考えながらの生活である。アメリカも研究費を手に入れるのは大変だと言っていた。お金が無いボスは、出来るだけ研究費を削減す方向で動いている、私はボスとの共同研究を展開するためということで来ているが、彼自身の研究では無いため、予算削減の一番の対象になるのである。当然である！私がボスでもそうするだろう。

私の仕事のほとんどは共焦点レーザー顕微鏡を使ってアフリカツメガエルやエゾアカガルの脳や皮膚、その他の臓器でのある蛋白の発現を観察することであった。その中で、エゾアカガルの皮膚に陽イオンを取り込むセンサーのような物が沢山付いていることを見つけた。どうしてもそれを電子顕微鏡（SEM）で観察したいのだが、ボスから許可が下りないのだ。さて、どうするかだ？SEMはバイオフィotonicsセンターにあるので、取り敢えず、自分が撮ったサンプルの写真を持ってセンターに乗りこんでみることから始まった。

Hey, there! ここにSEMの専門家はいる？これ、とても面白い写真なんだけれど、見てよと免疫染色のデーターを見せながら交渉を開始する。但し、お金は無いんだ！は全ての話が終了する段階で口にした。それでも、交渉は成立し、実験は動き出した。交渉の成否は相手に興味を持って貰えるか否かにかかる。でも、これは我々が生きる過程で何かを手に入れるためには絶対に必要である。若き頃、好きな人とのデートを成功させるためにも、そして、今、研究費を手に入れるためにもであ

る。

さて、ここでの生活は22年前のカナダに留学した時とは異なり、研究や住居環境などで様々なトラブルに見舞われる事になったが、それは別な機会にお話したい。

人生には無駄が無い！一見無関係に見える事柄は外見だけを変えながらも何度も何度も我々の前に姿を現す。それぞれの事柄は次の事象と有機的に繋がり、まるで人生の練習問題の様に我々の前に立ちただかる。その時は青色吐息で乗り越えるが、その問題をどのように解答できたかが次の問題に大きく影響を与える。我々は深遠な人生の修行を日常の些細なトラブルから災難に至るまでに見出すことが出来る。とは言っても次に何が待っているのか？勘弁して下さいよ、神様！と言いたいのも事実である。

(森)

水圏生物病理学研究室

平成29年度の水圏生物病理学研究室は、学部生15名、修士課程1年の森さん、西脇君、同2年の野村さん、堀君、共同研究者の難波博士（日本大学博士研究員）、藪博士（日本大学非常勤講師）、石川博士（栃木県庁）、教員間野の計23名で活動しました。就職状況も良好で、水産商社や食品会社に決まった者が最も多く、次いで水族館3名、鑑賞魚2名で、実家を継ぐ学生も複数おりました。なお、景気に左右されるものでもないと思うのですが、大学院に進学する者は1名でした。

研究活動としましては、昨年度まで博士課程で在籍していた竹内君（2017年4月よ

り東洋大学生命環境科学研究センター博士研究員)と和田君(2017年8月より台湾中央研究院 Academia Sinica 博士研究員)の両名が抜けた穴は大きかったのですが、難波さんが中心となって、魚病のいくつかの研究課題において成果を出すことができました。また、2018年2月に和田君が第4章(Coral diseases in Japan: 日本におけるサンゴの病気)を担当したCoral Reef Studies of Japan (Springer社)が出版されたので、サンゴに興味がある方は是非ご一読ください。

本研究室は、魚病(水族病理学とも呼ばれます)と、魚類を対象とした免疫(生体防御学や比較免疫学とも呼ばれます)分野を主要な研究課題としています。前者は病気を引き起こす犯人(病原体)の特定を目指す課題が多く、後者はワクチンなどの開発などにつながる基礎研究が中心です。前者の方が応用的でフィールドにも出ることもあり、人の役に立っているという実感も得やすいためか、魚病分野の課題を希望する学生が増えています。本稿では、この魚病を卒業研究課題として取り組む学生達の様子を描いてみたいと思います。

魚病学自体は、養殖学の一分野として発展してきました。しかし、最近では河川や海でも病気が多く認められます。また、動物福祉が重視されるようになってきたこともあり、魚病の研究を積極的に取り組む水族館が増えてきています。

上記のような状況ですので、研究室単独で取り組んでいる課題は少なく、殆どが養殖場や水産試験場、水族館、河川等を管理

する漁業組合等との共同研究となっています。そのため、魚病を卒業研究の課題とした学生は、まずその関連機関と顔合わせを行い、挨拶して名前を覚えてもらい、サンプルの供試やサンプリングなどの交渉をしていくことから研究が始まります。学生は、その過程でメールの書き方や計画書の作成、交渉を経験していきます。信頼関係を築くところまで自分自身の力でできると、自信にもなるようです。その頃には就職活動のピークが過ぎてしまっていることが多いのが残念ですが・・・。

その後は、関係する研究の過去の報告を調べ、関係する技術を習得し、実験解析を進めていくのは他の卒業研究と同じです。ただ、卒業論文とは別に、関連機関への報告書を作成する必要があり、関連機関が主催する会で発表を求められる者もいます。病気というネガティブファクターが研究対象ですので、守秘義務の発生や、被害を減らすためにも早く犯人(病原体)を特定して欲しいという要望が頻繁に届くことも。つまり、卒業研究のレベルで社会に近い経験ができるのが魚病の研究の特徴(魅力?)といえるかもしれません。教員としてはハラハラしながら見守ることがありますが、1年間かけてたくましくなっていく学生をみることができるのは、教員冥利でもあります。

(間野)



卒業研究発表後。

塚本勝巳先生に撮影して頂きました。

下田臨海実験所

本年度も海洋生物資源科学科をはじめ、森林資源科学科や理工学部海洋建築工学科など各学科の実験・実習・卒業研究、さらには学部のフィールド実習、小型船舶操縦法実習やダイビングライセンス講習など、多数の利用がありました。中でも海洋生物資源科学科「小型船舶操縦法実習」は今年度、100余名の学生が受講し、4月から8回の講義を学部で行った後、当実験所において1泊2日の日程で、実技講習および実技試験に臨み、受講者全員が無事小型船舶操縦士2級試験に合格し、ライセンス受領とともに、同科目1単位も取得しました。この他、下田市教育委員会主催の水産・海洋科学講座への講師派遣など、地道な地域貢献を行っております。

学部の危機管理対策の一環として、25人乗りの津波時の避難用救命シェルター2基の購入が決まり、来年度の学科1年次の基礎実習が始まる5月までに、実験所内芝

生に設置されることになりました。利用する機会が無いことを祈るばかりですが、20mを超える津波の来襲が予想される時に、全員が避難することの出来るとともに、収容人数が5日間生存するために必要な水および乾燥食料も備蓄予定です。そのため津波以外の災害時の備蓄倉庫としても利用可能な施設となります。

残念ながら昨年9月に実施された実習中に、食中毒を疑われる症例が発生し、地元保健所の指導を受け、従業員専用トイレの新設等の工事が行われています。この間、当実験所の他、学部の全施設で食事提供が休止しておりましたが、幸い4月から新たな体制で食事が提供されることになりました。

本年も引き続き、下田臨海実験所を利用する学生および教職員が事故無く充実した実験・実習を実施できるよう祈念致します。

(臨海実験所長 小島 隆人)

同期会便り

○2 期会

今年の第23回「二期会」は、10月20日（金）・21日（土）の行程を組み、四年半の日時を費やして修復完了した、日光東照宮の陽明門を見学に訪れた。然し如何せん両日とも、前線と台風20号の影響による雨に祟られて、散々な旅行となってしまった。先ず出発に先立ち、横浜集合者田中・瀬戸・大谷木と池袋集合者野村・富田・後夷氏の参加確認をすべきなのに、私が携帯を忘れてきてしまい、確認出来ぬまま出発してしまった。昼食の合流地点で、後夷幹事から何度連絡しても繋がらなかったと、怒られる始末でした。帰宅して確認をしたら後夷さんから5回・富田さんから1回着信の記録が残っていました。そんな訳で大変申し訳ないことをしてしまった次第でした。

昼食もそこそこに、雨の降る中をタクシーで東照宮陽明門に向かいました。雨の中、観光参拝客の多いのに驚きました。なかでも中国人の団体が多かった。陽明門の見学には、長い列が出来ており2時間ぐらい掛かるとのことで、折角だが諦めてホテルに帰る決断をして、集合場所から迎えのバスで、今夜の宿の「中禅寺湖畔ホテル」に向かいました。途中「いろは坂」を登ったり下りたりしながら、お天気であれば紅葉が素晴らしく眺められる筈であったのに、残念ながら良い眺めは得られませんでした。宿に着いてからも雨が続き、近くに有る華嚴の滝・立ち木観音の見学にも行けず、誠に残念な旅行になってしまいました。ま

あ！次回に期待しよう、と言うことで来年は、懐かしい三浦半島三崎を訪ね、美味しい魚をたべよう、ということで天候も安定している五月GWすぎに予定しました。次回が最後になると思いますので多くの参加者を期待しています。



左側：瀬戸、大谷木、富田

右側：野村、後夷、田中

（第2期 大谷木 緑四郎）

○12 期会

今年も、水産学科 12 期会を湯河原温泉のホテルで岩崎幹事の手配で7月6日、7日の1泊2日の日程で開きました。今回は地元の千葉君も数年ぶりに参加してくれて大変嬉しかった。我々も後期高齢者の仲間に入り、やれ、身体が悪い、血圧が高い...等、様々な理由で欠席する仲間も出て来て、今回は8名の参加となった。1年ぶりに再会し、皆さん元気そのもので夕食を囲み各人、近況報告し合い楽しい夕食の時間を過し、その後カラオケ等に場所を移し、3次会まで夜遅くまで楽しい一夜を過し、翌日、来年も元気で再会を約束し、それぞれ家路につきました。

(第12期 吉田 浩哉)



写真は左から、吉田、小沢、金坂、千葉、
宮地、厚川、田丸、岩崎

原稿の募集

桜水会会報 42 号の原稿を募集します。「職場便り」「近況」「クラス会」「随筆」など、800～1,000 字程度にまとめ、平成 30 年 12 月末までに下記にお送り下さい。なお、原稿は下記の電子メール（添付ファイルの場合、Word で作成のこと）でも受け付けています。

（送付先）〒252-0880

神奈川県藤沢市亀井野 1866

日本大学生物資源科学部

海洋生物資源科学科内

桜水会事務局 宛

E-mail:

fukushima.hideto@nihon-u.ac.jp

（福島）



訃報

山下 金義	(第 1 期)
蔦谷 信男	(第 3 期)
小泉 克和	(第 4 期)
坂口 朋子	(第 4 期、旧姓：秋山)
滝沢 多喜雄	(第 5 期)
山本 博	(第 5 期)
平木 隆	(第 7 期)
酒井 幹夫	(第 8 期)
村岡 勝	(第 9 期)
足立 惇	(第 13 期)
田中 章	(第 13 期)
田中 祥皓	(第 13 期)
平井 亨	(第 14 期)
大久保 久直	(第 17 期)
村井 正治	(第 19 期)
松葉 騰欣	(第 27 期)
西尾 和彦	(第 28 期)
保坂 文久	(第 32 期)

以上、18 氏には永眠されたとのことご連絡を頂きました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

近況報告

【第 1 期】

○小梶 泰佐

年相応に元気ですが亀井野は少し、遠い。皆様方のご健闘をお祈りします。

○杉浦 宏

卒業して 65 年、工夫しながら実験器具を作りなんとかデータを取り、レポートを書き上げ、高価な器具は教授と助手が扱うのを見学して分析実験が終るとい時代から見ると今の研究室は目を見はるばかりです。恵まれた環境の中で若い人達、頑張ってください。

○新美 憲太郎

名簿に杉浦宏さん内田さん未だお元気の様子、新美も加えて残り何名？考えてみるといろいろあったか、年を重ねて思うことは良いこと半分悪いこと半分だなあ... そう思うよ。皆さんお元気で達者に暮らして下さい。

○原 美

桜水会報を拝見、皆様のご活動を力強く感じています。又同期の逝去された方々冥福お祈り致します。私も本年 6 月米寿を迎へ体も歩行不自由老化防止のためリハビリ通院中ですが、体調良い日は庭木の手入など行っています。本年孫が日大藤沢資源学部にお世話になっています。益々のご発展を祈ります。

【第2期】

○大谷木 緑四郎

加齢のため欠席致します。桜水会の益々の発展と、総会懇親会の盛会を祈念いたします。

○今井 直彦

桜水会の発展を祈念します。

○富田 敏郎

総会・同窓会案内有難う御座いました。卒業以来半世紀余を経て会員とは名ばかり折角の行事にも不参加が続いています。ぼちぼち先が見えて来ましたので冥途の土産に藤沢校舎を見学しておくのも良いかと総会にだけ出席させていただきます。よろしくお取り計らい下さい。

体調上出席が難しくなりましたので急遽「欠席」に変更させていただきます。勝手に申し訳ありません。

【第4期】

○國守 俊策

久しぶりに同期の山田君が登場してくれた。未だ達者な同期生は存在する事と思う一言会誌に元気な事をお知らせください。私もボロボロボディでペンを持って短信を送っています。下馬の校舎の中で雨宮先生の講義をきいた頃を思い出してあいつも元気かと一言いって下さい。高松の久本君、兵庫の高嶋君、元島君、元気？

○久米 穂積

出席する予定でしたが3月末より第12

胸椎圧迫骨折が判明し現在コールセットを巻きつけ治療中です。2年前、2015年8月に書き残した小さな本が(若き日の南氷洋捕鯨)国立国会図書館に蔵書として残される事で一安心しており、その時の疲れが出たのかと思われています。次回こそは出席したいと思っています。

○日野 演彦

体調がすぐれません欠席します。一期の山下さん、四期の小泉君、坂口(旧性秋山)の二名なくなりました。

【第5期】

○石川 憲三

近頃は頓に前司行長、鴨長明、劉挺文などの無常観あふるる章句から、惜陰へのおもいが強く、毎日が「好日でありたい」と、暮らしています。

○柴山 佐武郎

足が悪く失礼します。

○浜高 善祐

ご案内頂き一度出席したいのですが、輪島からでは遠く、つい遠慮がちです。毎日元気で人生を楽しんでいます。5期生の皆さん頑張って下さいね。

【第7期】

○大西 慶一

小生、一応元気で日々暮らしていますが最近めっきり遠出が少なくなりました。総会、同窓会等盛会に開催されることを祈り

ます。

○関 洋介

ご案内ありがとうございました。都合により欠席します。桜水会の益々のご発展を祈念申し上げます。

【第8期】

○片山 満雄

いつもご苦労様です。水産都市稚内は通年操業の底曳漁業は別として今は毛がに籠漁業も漁期終了し、こらからはホタテ貝漁業がオホーツク海に面した各漁協で始まります。又観光に力が入る時期でもあります。

○村田 安彦

会報 41 号、8 期の櫻田君の職場だよりを読ませて頂き、元気で御仕事を続けている様子、これからも頑張ってください。私は、今回も、出席できませんが総会の盛会を祈願致します。今札幌ライラック祭りが盛大に行われております。

○藤原 貞夫

八十代をすぎる、体力がなくただ生きているだけです。8 期生 7～8 人死亡を知っている。私いつ終活なのか？桜水会のご発展をおいのりいたします。

○鈴木 源五郎

一人で外出できませんのでよろしく。

【第9期】

○高山 三郎

80 歳代が近づくに従い体力の衰え、病に侵され亡くなられる同輩が目立ち寂しさを覚えるこの頃です。大学時代の大親友であった村岡勝氏が平成 29 年 2 月 4 日に永眠されました、心よりご冥福を祈りつつ合掌。桜水会の発展と事務局員の皆様方のご活躍をお祈りいたしております。

○本間 誠三郎

卒業以来、北海道での生活です。いま、水産資源の動向が、北海道漁業、加工業等に、そして、われわれの日常生活にも大きく関わっています。今こそ、「海洋資源の維持管理への研究と対策」が急務と思われまます。これからの桜水会の益々のご発展を祈ります。

【第10期】

○安藤 行夫

80 歳を迎え不具合が多くなりました。

○川端 肇

傘寿を迎えました。10 期生の会には出れずゴメン櫻木、皆さん。本下、焼田、三木等と会って酒を飲んで楽しんでいます。

○櫻木 進

総会開催おめでとうございます。卒業以降 56 年が経過いたしました。八十歳を過ぎ同級生の皆さんの顔が浮んでまいります。終の人生、ヒッソリと過し、ころりと行きたいです。

【第11期】

○友行 一紀

大学のミニクラス会にはいつもご出席下さった成瀬先生、学生時代カッターと一緒にオールに汗した吉原先生の訃報は寂しい限りです。築地市場で頑張っていた廣瀬泉君も今年退職します。私は勤務続行中です。会社のOB会と重さなり欠席させて頂きます。

○松岡 玳良

げんきだよ!!

○本池 定之

今度、体の調子で残念ですが行けませんので宜しくお願い致します。

○森 文也

ご盛会をご祈念申し上げます。私事の祝事があり申し訳ございませんが欠席させて頂きます。11期の皆様によろしくお伝え下さいませ。

【第12期】

○宮地 克彦

いつもありがとうございます。この2月で76歳になりゴルフ、カラオケ等に悠々自適に過ごしています。

○吉田 浩哉

藤沢市のスポーツ推進委員と体力測定員をしています。週、2、3回市内小学校で体力測定を行っています。又、2020年東京オリンピックで江ノ島がセーリング会

場に決まりこれらが大変いそがしくなります。

【第13期】

○池津 幹男

遠いこともあり出席できず残念です。昨年熊本地震ではおかげさまで私の家はほとんど被害もなく、すみました。こちらに移って以来、熊本の土地の良さ、人の良さを日々、感じております。地震後の多くの方々の努力、前向きな強い心を感じ入っております。

○一石 稔

大変申し訳ありませんが、体調不良ですので欠席させて頂き下さい。ご連絡、ありがとうございます。

○須田 泰雄

私は、「山の会」に入っており、新緑の山、紅葉の山を歩いています。桜水会のご発展をお祈りします。

○周 耀佳

1999年2月、国立台湾海洋大学教職引退、名誉教授。

○平田 家興

ゴルフや野菜栽培を楽しんでおります。

○横地 龍男

同期、鳥居、前川と共に出席予定。

○渡辺 啓一

(株)エバラ物流で相談役として勤務しておりますが後期高齢者となり仲間も内外共に減り引退も考える年齢です。最後になるかと思ひ出席させていただきます。

【第14期】

○長田 光司

関係者の皆様御苦勞様です。私は定年後14年間千葉にて単身赴任で会社経営をしておりましたが今は毎日が日曜日です。認知症予防の脳トレ等にチャレンジしています。

○篠崎 丈夫

桜水会役員の方々お世話様です。今回自分は欠席させていただきます。先日5月27日(土)同期9名(一家、井上元、長田、杉山、水島宏、森田、望月、篠崎、山口(幹事)の各氏)が集いました。東府中での大変楽しい素晴らしい宴でした。

【第15期】

○井村 圭輔

会報をありがとう御座居ます。現役時代を懐かしく思い出しながら読せて頂いて居ます。

○小松 保雄

あいかかわらず、地元の小学校で子供達に剣道を教えています。

○添田 一萬

今も、ジョギング 10km を 60 分以内の

ペースで週一回走ってます。橋ヶ迫会長、加部副会長大変でしたね。以後体調に気をつけて下さい。有難う御座いました。

○宮 忠義

桜水会関係者の方々御苦勞様です。小生夢とロマンとソロバンで年を重ねて元気で過ごしています。昨今の国内、世界の情勢は波乱万丈で先が不透明で自分を見失う様です。まずは一日一善で頑張っ参ります。

○平岩 良允

来年は後期高齢者記念して出席したく思います。

【第16期】

○牛島 博之

ごめんさい。

○関根 敏彦

都合つかず何うことができず残念です。癌手術より5年経過無事終了、体力回復にゴルフなどに頑張っております。来年こそ、仲間と出席したいと考えております。会員、皆様の益々の御活躍と御健勝を祈念致します。と共に成瀬先生、長谷川氏の御冥福をお祈り致します。

○谷岡 勉

今なお但馬魚市場会長やってます。お立寄り下さい。成瀬師、学友、青木、長谷川君の御冥福を祈ります。岩手県、宮古市の若山進君の消息をご連絡願います。

○戸室 金治

趣味の園芸で過しております。同窓会の発展をお祈り申し上げます。

○柳沢 踐夫

“朋あり遠方より来る。亦楽しからずや。〰
毎日が発見!毎日が勉学の日々!・・・

○山本 武人

同期の皆さんお元気ですか!早いもので卒業 50 年です。当時の下馬や馬堀はすっかり変貌して昔の面影が全くないですね。今となっては、馬堀実験所での生物実験や、小田原の田代蒲鉾店での過酷な実験経験も楽しい思い出となっています。

【第 17 期】

○新井 正尚

群馬県では福島第 1 原発の事故以来今でも放射性物質の安全検査を行っています。赤城大沼のワカサギについて趣味の釣りを生かしてボートや氷上での検体採捕に協力しています。

○鈴木 實

海外出張の為、出席できず申し訳けありません。

【第 18 期】

○新井 健次

新カリキュラムによる新設科目「技術者の倫理入門」(JABEE コース必修)を平成 27 年後期から非常勤講師として平成 28 年度後期まで勤めました。この体験をした

ことで恩師の先生方の御苦勞を改めて思い知らされました。

○小黒 信夫

昨年は、吉原さんが亡くなり、日大水産の活躍が見られないのは残念に思います。若い卒業生の奮起を期待しております。

○野村 康雄

成瀬宇平先生の訃報を知り心より冥福をお祈り申し上げます。今年古希(70 歳)を迎えました元気で過ごしています。

○服部 正巳

現在年金生活しております。今後共よろしくお願い致します。

○橋ヶ迫 覚

楽しみにしております。

○林 公義

今年 3 月で生物資源科学部の博物館講座の非常勤講師を終了しました。全国に数人の卒業生が水族館・動物園・博物館に勤務しています。中国山水画を始めたので毎年 3 回程、中国を訪れており、今回も桂林に滞在中なので出席かないません。会の御発展を!!

○原 博隆

現在カッター部 OB 会の役員として学生の面倒を見ております、今年はカッター部創部以来初の女子 2 名のクルーが誕生、男子に混じり漕いでおります。

【第 19 期】

○阿部 裕司

いつも、案内、有難うございます。

○加部 郁夫

19 期卒の皆様元気ですか！早いもので来年の会報では遅いので今回書いておきます。次回では遅くなりますが 50 年毎の同窓会になりますので、ぜひ一度皆出席して下さい。宜しく申し上げます。私も去年は病で皆様に大変御迷惑をお掛けしましたことおわび申し上げます。

○篠田 幸博

現在全日本山岳写真協会の理事を務めています。会員は全国 350 名程毎年 9 月に池袋の東京芸術劇場にて写真展を行っています。今年は 9 月 5 日～10 日に開催、毎年 1 万人以上の入場者があります。山に関心がある方ぜひご来場下さい。

○武田 修一

まだ仕事しています。

○田崎 春生

週 3 日の仕事、月 2 回の樹林ボランティア、磯釣り、登山など、まだまだ元気になっています。

○松井 正之

所用で出席出来ないのが残念です。同期皆様、特に日大号乗船された方一度会合もちましよう、よろしく。

【第 20 期】

○太田 忠

先般、行年 99 歳の母を自宅で看取る。私は 40 歳過ぎに印刷編集業を起業し出版社を志し、何とか仕事も軌道に乗せるも母の病いもあり、こころならずも主夫となりてその後また父も看取る。いま 73 歳では半農半漁生活の夢も笑止にて、せめて骨灰は海洋へと願う昨今です。

○土肥 正晴

桜水会、海洋生物資源学科の発展を祈っております。

○行川 泉

本年 (H29 年度) 4 月末にて会社を退職しました。今後共宜しくお願い致します。以上。

○長谷川 勝治

この日、欠かせない用事が入っている為、欠席いたします。誠に申し訳ありません。

○本間 英一

震災後 7 年目をむかえ、石巻の門脇地区の復興も進んできました。復興住宅も 4 棟完成し、1 年前の 27 戸から現在は 160 世帯になりました。

○南 義久

和歌山での生活を切り上げ神戸に帰って来て早 3 年になります。元気に妻と二人で過しています。ニチロ、マルハ (株) を退職して和歌山へ、今思えば長い様で短い

人生、神戸でもう少し頑張っただけです。
桜水会の発展を祈っております。

【第 21 期】

○三浦 勝

病気をしまして、遠方への外出は、困難のため欠席させていただきます。残念です。

○広瀬 幸一

主に中近東から原油を運ぶ大型タンカーの航海士を 39 歳まで勤め、その後一念発起、第 2 の人生として、社会保険労務士・行政書士となり早 30 年が経ちます。70 歳になりますが、当分は現役です。仕事だけでなく年数回の海外旅行を楽しみます。

【第 22 期】

○村松 立朗

皆様お疲れ様です。小生、この 6 月を迎え満 67 歳となります。教員を定年後、再任用等を経て 12 月には民間会社勤務 3 年を迎え、元気に頑張っているところです。水産食品加工会社ですが、衛生担当をしております。安全で美味しいネギトロを商品として皆様にお届けしております。

【第 23 期】

○伊藤 浄治

年金暮しですが、今年も 1 年間嘱託職員として働いています。

○大杉 幸毅

大病で 2 度手術を受けましたが、現役に

復帰し、チェルノブイリ原発被ばくの子供の治療に 2 回行きました。ユーチューブに動画をアップしていますので観てください。

(「ウクライナボランティア治療」で検索)

○太田 道男

第 2 人生、第 2 職場として横浜で働いています。

○河村 桂吉

65 歳になりましたが現役で頑張っております。

○塩澤 光一

咀嚼研究を進めています。特に高齢者では「食品をふつうに食べる」ことの重要性をもっと広く知っていただけるよう「日本咀嚼学会」等で活動しております。日本咀嚼学会ホームページへぜひ！！

○高橋 雄三郎

年金受給の生活となり、今後の生き方について多々考えを・・・と思いつつ変化のない日々を過ごしております。桜水会のご発展を祈念しております。

○平栗 洋一

日本大学を定年退職。練習船日本大学号に機関士として 4 年。その後事務職員として農獣医・生物資源・歯・本部に 38 年間お世話になりました。平成 9 年にカッター部が全日本大会で初優勝したことが一番の思い出です。

【第 24 期】

○石田 修己

2011、3 月 35 年勤続した会社（大学勤務）を定年退職した後、自宅で静養しています。55 歳の頃ケイ椎ヘルニアを手術後、歩行が若干困難の為同窓会等、今後とも欠席させていただきます。

○堀井 勉

水産学科卒業後、約 30 年遠洋カツオ・マグロ業界で国際関係の仕事に携わってきました。その後転職し現在は液体凍結装置の製造・販売を行っている企業で働いております。この装置は近い将来冷凍食品業界のみならず物流や食品産業そのものに革命をもたらすと思います。未だ現役、多忙なため今回は欠席させていただきます。

【第 25 期】

○大野 誠

恩師の訃報が続き、さびしいかぎりです。

○森 誠一

元気でやっております。

【第 26 期】

○大内 一郎

今年の 10 月で東京パワーテクノロジー株式会社を定年退職します。

○小河 敏郎

現役で原油タンカーの機関長として乗船中です。

○清水 春生

今年 65 になりましたが、相変わらず警戒船・船長として忙しい毎日を送っております。今年はシフトの関係で、出席できません。皆様の御活躍をお祈り申し上げます。

○高橋 昇

昨年平成 28 年 26 期魚業の連中と亀戸で飲み会を開きました。20 名集まりました。26 期と言っても昭和 47 年の入学者達です。皆様飲み会に来ませんか。03-3622-8796 タカプラ高橋です連絡下さい。

【第 27 期】

○本郷 久

桜水会事務局の皆様、ご苦労様です。私 62 歳になりましたが、自営の為、現役！！出席できません。個人都合で申し訳ありませんが、堀野君、「連絡されたし、前会の会報により、土方君から連絡あり！！小谷君、元気か？」。TEL0263 (64) 2446 まで。

○橋本 和則

長年住み慣れた名古屋を離れ生まれ故郷にもどってきました。

○松永 一男

私は現在大阪校友会農獣医学部（現生物資源科学部）支部長を仰せ付かっています。先月も会合を開きました所 30 名ぐらいの出席でしたが水産学部出身者が多くうれしかったです。

【第 28 期】

○岩崎 鉄也

今は当時のことを懐かしく思っております。

○鈴木 稔

定年退職を迎えましたが引き続き同じ組織で国際協力の仕事をしています。週末は乗合船で釣りを楽しんでいます。

○鈴木 聡（旧性：岡）

2011 年定年を待たず勤務先が破算、その後 5 年間自営でやってきましたが、こちらも厳しくなり、2016 年から日本年金機構の職員として第二の人生を歩んでいます。

○津崎 順

2017 年 3 月末に定年退職した後もふくしま海洋科学館（アクアマリンふくしま）に残る一方、市民を対象に自然に親しみ大切に思う心を育てる自然案内人活動に汗しています。

【第 29 期】

○柴田 一郎

欠席させていただきます。2014 年より岩手県陸前高田に単身赴任しております。趣味のスキーも頑張っています。会報ありがとうございます。

○笛木 隆

昨年還暦を迎えました。現在千葉県、漁業協同組合連合会で参事として現職のま

ま停年延長して働いています。もう数年頑張りたいと思っています。

○星川 正文

申し訳ありません。今回も欠席させていただきます。ご盛会を祈念いたします。

○小嶋 英明

リラクゼーションでお客様に喜んで頂ける様がんばっています。

○成瀬 晃

ウナギで有名な浜松に住んで 37 年になります。還暦を迎える年代になり、学生時代を懐かしく思います。今はダム管理の仕事しながら趣味のルアーフィッシングを楽しんでいます。当時作った、JLAA 日大支部は今も有るのかなあ？桜水会の発展を祈っております。

【第 30 期】

○北谷 晶司郎

藤沢校舎で学んで 40 年。一度は行きたいと思っておりました。

○鈴木 彰一

還暦も近くなり、初孫にも恵まれ、末子も来年には大学卒業。休日は趣味の溪流釣りや野生動物観察研究で過しています。

【第 31 期】

○逸見 明久

福岡県立戸畑工業高等学校の校長として 2 年目を迎えています。水産高校を離れ

て3年経過しましたが、水産業界にはいつもエールを送っています。3年後には退職します。是非桜水会に出向いていきたいと楽しみにしています。事務局の皆様毎年お便りありがとうございます。

○小林 善昭

いつもありがとうございます。

【第32期】

○井上 博

卒業して35年になります。両親もすでに他界し、今月3回目のモルディブ旅行へ内縁の妻と旅立ちます。来年はエーゲ海クルーズを予定しています。何時死んでもいい様に今楽しんでいきます。

○守田 正文

今年（平成29年）4月から、2人の孫の朝夕の保育園と幼稚園への送り迎えが私の仕事となり、生活のリズムが一変しました。同居してくれている娘夫婦に感謝しつつ、「仕事」より「孫の都合」優先の日々を過ごしています。自分の健康にも気をつけるようになりました。

【第34期】

○桂田 一彦

11年ぶりに東京に戻ります。次回、お会い出来る事を楽しみにしております。

【第36期】

○小南 紀子

子育てが一段落する頃なのでしょうか、

近年中学・高校・大学時の同級生が連絡をくれます。なかなか参加できていませんが、皆様のお元気の様子が伺えて幸いです。熊本同窓生がお元気そうで、ホッとします。

【第45期】

○岡田 薫

元気にして居ります。卒業後もアマチュア交響楽団でずっと活動しています。

○小長谷 幸史

新潟薬科大学に新しくできた理科教職コースの生物学研究室に移動しました。どうしたら理解が深まる授業になるかが現在のテーマです。

○原口 弘嗣

神奈川県内で仕事をしています。当日は、仕事の為出席できません。来年以降は、ぜひ出席したいと思います。夏は、家族で良く、下田の海に遊びに行っています。

【第47期】

○鈴木 健生

ご無沙汰しております。私は、現在も測量の仕事をしています。

【第55期】

○川名 伸明

ご準備、取りまとめなど、いつも大変にお疲れ様でございます。なかなか土地柄出席が叶わず申し訳ありません。新潟で元気で過ごしております。

【第 56 期】

○井上 麻衣

私はこれまで大学や企業の医学研究分野にて実験業務に従事してまいりました。現在 6 ヶ月間の予定で、日本の企業よりスイスに本社のある企業のシンガポール社へ派遣され、技術指導を受けています。

【第 60 期】

○新井 龍

会報 41 号、吉原先生と写真にうつっているのが私達です。下田での楽しい思い出がよみがえってきました。ご冥福をお祈りします。

【第 63 期】

○関根 和輝

私用の為、欠席致します。何卒、宜しく願致します。

【第 65 期】

○泉 宏明

間野先生には、大変お世話になりました。お元気ですか。仕事の都合で残念ながら行けません。ご盛会をお祈りいたします。

会計報告

平成28年度日本大学桜水会の収支決算は以下の通りですので、ご報告致します。

会計担当 小糸 智子

平成28年度 日本大学桜水会決算報告書

1. 収入の部

項目	予算額	決算額	摘要
準会員年会費	1,705,620	1,808,000	
繰越金	714,494	714,494	
会報発送補助	200,000	200,000	学部校友会より
雑収入	0	50,000	同窓会祝儀50,000円
利息	5,000	2,255	
その他	1,000,000	1,000,000	終身会費積立金一部取り崩し
合計	3,625,114	3,774,749	

2. 支出の部

項目	予算額	決算額	摘要
通信連絡費	690,000	708,753	
会報・総会案内発送	650,000	681,474	
通信費	40,000	27,279	
事業費	2,380,000	2,003,854	
会報発行	260,000	257,580	
準会員対策費	430,000	375,620	運動会Tシャツ、基礎実習支援ほか
卒業記念品	180,000	172,800	タイピン、ブローチ
総会・同窓会費	500,000	515,312	
名簿管理費	150,000	144,845	業者委託
学科パンフレット作成補助費	430,000	195,472	
学会参加費補助(学生)	300,000	190,029	13件
講演料	80,000	65,000	5名分(概論、交通費含む)
その他	50,000	87,196	学生表彰、卒論コンペ、振込手数料、祝儀代
事務局費	300,000	189,920	
会議費	130,000	89,006	
会議時交通費補助	30,000	12,000	
消耗品費	30,000	4,914	
アルバイト費	100,000	71,000	
その他	10,000	13,000	
慶弔費	30,000	32,400	
予備費	225,114	0	
繰越金	0	839,822	
合計	3,625,114	3,774,749	

終身会費積立金

平成27年度まで	24,042,544	
平成28年度	-970,000	積立金一部取崩(-100万円)、3名入金
合計	23,072,544	三井住友銀行、かながわ信用金庫

会員名簿発行積立金

平成27年度まで	1,233,014	
平成28年度収入	262	利息262円
合計	1,233,276	横浜銀行定期

事務局便り

○事務局長を務めております森が昨年7月より約7か月に及びアメリカ San Diegoにある Salk 研究所に留学をさせて頂いておりました。その間、杉田先生に事務局長の代行をお願いしておりました。Salk での経験は私の生物機能化学研究室からの報告でおこなうこととして、今年の桜水会総会の後、構成も一部刷新されました。会長は橋ヶ迫 覚氏、副会長は黒澤 慶司氏、原 博隆氏、監事に新たに田中 英臣氏 45期、今川 壮浩氏 47期、顧問に鳥居太郎氏、相談役に新井 健次氏、加部 郁夫氏に決定致しました。

○平成29年度の卒業生（第67期）は134名となりました。卒業生各位のご指導、ご鞭撻をよろしく願います。これに加えて、正会員の総数は9107名となります。

○平成28年度1年次前期開講科目 海洋生物資源学概論の一環として、6月27日（火）長谷川勝治氏（20期、元・焼津水産高校校長）7月11日（火）小橋史明氏（62期、ベニレイ株式会社）加藤聖也氏（64期、丸千代田水産株式会社）7月18日（火）増田真之介氏（64期、新潟県立海洋高等学校）加登岡大希氏（60期、新江ノ島水族館）の講演会を実施しました。

○桜水会会員各位の住所、勤務先、電話番号などに変更がありましたら、個人情報保護の観点から、桜水会ホームページの「名簿修正依頼」上で直接修正していただくか、<http://cgi.solution1.jp/osuikai/meibo.php>

（Yahoo で検索：日大桜水会 → 名簿修正依頼）もしくは郵送にてご連絡ください。なお、平成22年4月1日より、日本大学生物資源科学部の郵便番号が「252-0880」に変更となっております。ご注意ください。

○本年度の総会は、6月9日（土）ごろに本学部で開催予定です。会員各位におかれましては、ふるってご参加の程、お願い申し上げます。

（事務局長 森 司）

【お尋ね】

○先日、芸術学部の元非常勤講師の方から、水産学科当時の学生歌で、「水産逍遥歌」と「蒙古逍遥歌（もうこほうろうか）」についてお問い合わせがありました。何人かのOBの方に伺ったところ、その歌は学生手帳に載っていたはずとのことでしたが、歌詞などについては記憶が定かでないようです。つきましては、ご存知の方は是非、事務局までご連絡いただきますようお願い申し上げます。

（事務局長代理 杉田治男）

編集後記

○桜水会会報本号では、「職場便り」（4件）、「同期会便り」（2件）、および会員の「近況報告」を掲載しました。

○桜水会のホームページ（HP）を立ち上げ、学科HPにリンクしております。桜水会の沿革・歴史、役員・事務局、各卒業期の会員数の他、桜水会会報24号（平成11年度）以降のバックナンバーを掲載しており、ダウンロードもできますので是非ご覧ください。学科ホームページのアドレス <http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~kaiyo/>です。

○同窓会を企画されている幹事の皆様へ
個人情報保護の観点から名簿の提供は困難な状況です。対応策としまして、総会案内送付時に、幹事の方が作成された同窓会開催案内を同封する形をとらせて頂いたこともありました。必要に応じて、下記にご相談ください。

E-mail:

fukushima.hideto@nihon-u.ac.jp

（福島 英登）

住所変更手続きについて

平成22年3月1日より、桜水会ホームページ上から名簿（住所・勤務先等）変更届けができるようになりました。

<http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~kaiyo/>

日本大学桜水会会報 42号

平成30年3月 発行

編集 日本大学桜水会事務局

発行 日本大学桜水会

日本大学生物資源科学部

海洋生物資源科学科内

〒252-0880

神奈川県藤沢市亀井野 1866

電話 0466 (84) 3680

E-mail: mori.tsukasa@nihon-u.ac.jp